茜色の歌姫

第三部　有馬皇子の変

飛鳥時代の武人

蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰く、「天皇の治らす政事、三つの失あり。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚ること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を費やすこと。二つ。舟に石を載みて運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有馬皇子、（中略）欣然びて曰はく、「吾が年初めて兵を用ゐるべき時なり」

（中略）是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣はして、（中略）有馬皇子を市経の家に囲む。
（中略）皇太子、親ら有馬皇子に問ひて曰はく、「何の故か謀叛けむとする」とのたまふ。
答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」

（『日本書紀』巻第二十六）

春過ぎて夏来るらし　白妙の衣干したり　天の香具山

（『万葉集』巻第一）

第一章　木幡

658

ここから、都を眺めるのが好き。

乙女は、足下の草むらを斜めに倒しつつ紋様を描く風に、束ねた黒髪を靡かせつつ言った。

「この山に立つたびに、景色が変わる」

天の香久山と呼ばれる小高い山は、かつての板蓋宮に築かれつつある都から二町（約1・7キロ）。十三歳の乙女の足でも、造作なく登れる。

「讃良」

ふっくらした丸い貌。目尻が垂れ下がり、重たげな唇、ゆったりと盛り上がった頬骨、見る者を和やかにさせる面立ちだが、広い額が聡げな乙女は、傍らに膝を抱えて坐す、もう一人の乙女に、歌うように言った。

「麓の邑の者どもが、白妙の衣を干している」

楮の樹皮から採った糸を紡ぎ、白布とする。夏が近づくと、ひとびとは、蔵や筐から、白布を仕立てた夏着を取り出し、日に晒して、虫干しをする。春に植えた稲が伸び、一面に青々と拡がる田に、干した白布が鮮やかに映えていた。

「木幡」

膝を抱えて坐した乙女――十三歳になり、手足がしなやかに伸び、頬から顎、胸にかけて、よ

うやく女らしいなだらかな膨らみを見せはじめた讃良が、吐き捨てるように言った。
「都の景色が変わる度に、諸々の国から、万を数える民が随れ去られ、残った者どもの怨嗟の声が満ちる」
木幡は振り向き、讃良を見て微笑んだ。
何故だろう……。
讃良が、雪解けの川のせせらぎのように伸びやかな木幡の言葉を、甲高く覆い被せるように否定する度に、木幡は切なげな眼差しを向けて微笑む。
その眼差しに、讃良は苛立ち、それでいて、その眼差しの下に浮かぶ微笑みを見たくて、日が昇れば家を飛び出し、香具山の麓に住まう木幡の家の戸を叩く。
木幡と讃良は、同じ年に生まれた。大化という元号が定められる前年、板蓋宮で蘇我鞍作が討たれた年。
讃良は、葛城皇子に組みして鞍作謀殺に加わった蘇我石川麻呂の孫。
木幡は、蘇我鞍作が大王に擁立しようとして、鞍作に続いて討たれた古人皇子の娘。
讃良は四歳の時に、木幡は生まれたばかりの時に、ともに父を、葛城皇子に討たれた。二人が、親しむようになったのは五年前。大王位にあった豊日大王が、宝皇女にその御位を奪われた頃。
豊日大王の後ろ盾であった葛城皇子は、母なる宝皇女が大王になってより、政事の場から消えた。ために、逆賊の汚名を着せられて死んだ古人皇子の子たる木幡も、同じく罪人として死んだ蘇我石川麻呂の孫なる讃良も、公然と共に遊べるようになった。
二人が親しむようになったきっかけを、二人は覚えていない。

「木幡よ」
讃良が、不意に地面を指さした。
「蟻だ」
指さした先に、小指の先ほどの穴から、黒い蟻が列をなして出入りし、地にこぼれた食物を運び入れていた。
振り向いてこちらを見る讃良の、邪気のない笑みに、木幡は微笑んだ。
木幡のなにげない一言に、理もなく貌（かお）を強張らせ、刺々しく応えた後、讃良は必ず、無邪気な叫びをあげる。それが分かっているから、木幡は讃良と共にいる。讃良が、木幡と共にいることを望んでいるから、共に遊ぶ。
「この蟻どもが仕えているは、何者と思うぞ」
声を弾ませて問う讃良に、木幡は首を傾げた。讃良は、応えを聞くまでもなく、自ら口にした。
「女王の蟻」
讃良は立ち上がった。立ち上がると、小柄な木幡が見上げる先に、大柄な讃良の顎が喉に迫り、細長い眉の下にある切れ長の眼が、涼しげに木幡を見おろしていた。
「汝も吾も、大王家の血を引く者。故に」

天香具山（奈良県桜井市）

すっと伸ばした腕の先に、飛鳥の都が拡がっていた。
「大和を治める者になるやも」
「讃良は」
木幡は、眼を細めて笑った。
「大王(おおきみ)になるのか？」
眼を見開き、笑みつつ唇を引き締める讃良に、木幡は重ねて問うた。
「讃良が大王になって、何をする？」
「吾が大王になれば……」
讃良の貌から笑みが消えた。
「吾が母を討った者どもを、ことごとく討つ」
「軍(いくさ)を起こしてか？」
「然り」
「軍を起こせば」
木幡は、眼差しをやや潤ませて言った。
「吾や、讃良と同じく、多くの子が親を失う」
讃良は、そっと瞳を横に動かし、悲しげな面持ちで首を傾げ、じっと飛鳥の都を見下ろす木幡を眺めた。
同じく親を討たれた子。
だが、木幡が、父なる古人皇子を討たれたときは、未だ乳飲(ちの)み子であった。讃良は四歳。眼の

前で、敵に囲まれたなか、自ら剣で胸を突いた母の姿が、おぼろげながら脳裡に焼き付いて離れない。
母を死なしめた者の名は、知っている。
葛城皇子。
木幡の母を死なしめた者も同じく、葛城皇子。
だが、木幡は、葛城皇子への恨みが薄い。なぜなら、己(おの)が母の死を、眼で見ていなかったから。
そして、讃良にとっては……。
葛城皇子は父。
木幡の親を討ったのは、讃良の父。讃良の母を、死に至らしめたのも、父なる葛城皇子。
父なる人は母の仇……。
そこまで思い至って、讃良は首を振る。
否。吾には、父はいない。
木幡は知っているのだろうか？　彼女から父母を奪ったのが、吾を産ませた葛城皇子であることを。幾度も、それを問おうとして、口にできずにいる。
木幡の小さな背を見つめる度に、讃良の胸はしめつけられそうに感じる。小柄だが、その背は寛(ひろ)げで、柔らかく丸い。骨ばった己が四肢を見比べる度に、そのふくよかさが愛(いと)おしくなる。
「木幡」
讃良は、そっと木幡の後にしゃがみ、その背を抱いた。ゆっくりと振り返る木幡の頬に、己が額を寄せる。

「吾が大王になれば、木幡のために、飛鳥でいちばん大きな宮を建てる」
「宮は要らぬ」
木幡は、手を伸ばし、讃良の髪の毛を撫でた。
「家がひとつあればいい」
「その家には、庭を造ろう」
「如何なる庭を？」
「池を穿ち、船を浮かべよう」
「大きな池」
「その船で、一日、ともに遊ぼう」
「ならば、家など要らぬ」
木幡は笑った。
「今も、汝と遊んでいるではないか」
和らげに拒まれ、讃良は木幡から身を離した。立ち上がり、踵を返して背を向け、拳を握りしめた。
「讃良……」
立ち上がって歩み寄る木幡に、讃良は叫んだ。
「嫌い」
声もなく立ちつくす木幡に、讃良はなおも重ねて叫んだ。
「木幡は……嫌い！」

叫んで讃良は駈け出した。
山道を駆け下りながら、讃良は滴る涙をしきりに拭った。
何故……。
幾度も幾度も、讃良は木幡にその言葉を投げつけた。嫌い。だが、山を降り、家に戻り、寝屋で一夜、泣き明かし、夜が明ければ、木幡に会いたくてたまらず、木幡の家の戸を叩く。
そんなことを幾度、繰り返したろう。
木幡は今、寂しげにうなだれ、目尻を濡らし、とぼとぼと歩いているに違いない。
すぐにも引き返し、謝りたい。あのふくよかな丸い躯を抱き締めたい。でも、足が止まらない。
不意に、讃良は立ち止まった。
背後の、さきほど木幡と二人で飛鳥を見下していたあたりで、鋭い悲鳴があがった。
誰……。
本来、香具山は神域。人が立ち入ってはならぬ山。だからこそ、讃良は禁を破って木幡を伴い登った。この山に登れば、誰にもはばかることなく、二人きりになれるから。
叫んだのは木幡か？　木幡だとしたら、何故に？
讃良は踵を返した。駆け下りてきた山道を、再び駆け上がりはじめた。
……。

讃良は息を呑み、立ちつくした。
山の頂の草むらで、人がうごめいていた。膝丈に茂った草むらから、男の背が突き出していた。
「騒ぐな」
男の声が鋭く響いた。
「怖がることはない。誰でもしていること」
その声は、離れて立ちつくす讃良ではなく、男が組み敷いた相手に向けて発せられていた。
「脚を開け。愉しもうぞ」
その言に、讃良の躯が動いた。草をかきわけて走り寄って来る讃良の気配に、男は貌をあげた。
その貌を、讃良は蹴った。
男は横倒しに倒れた。木幡が、胸をはだけ、仰向けに伏せていた。硬く閉じていた眼が見開かれた。
「汝は……」
男は、血が噴き出す鼻を左手で押さえて呻いた。髪をみづらに結い、齢は十七か八か、鮮やかな刺繍の入った衣をまとっていたが、陽物も露わに袴は脱ぎ捨てられている。
「何者ぞ……吾は皇子。無礼であろう」
男の右手が、草むらに置いた剣に伸びた。束を握って立ち上がり、にくにくしげに讃良を見つめた。
「神の裔たる皇子が身を害するとは……」
言いかけて、男の四肢が硬直した。讃良は、男の股間を、蹴り上げていた。

股間を両手で押さえ、白眼を剥いて膝が落ち、そのまま貌から突っ伏した。
「讃良！」
木幡が悲鳴をあげた。
「よせ、讃良！」
讃良は、男の剣を奪って鞘を払い、幾度も幾度も、男の躯に振り下ろしていた。血飛沫が讃良の貌を衣を、あかく染めた。
「讃良！」
木幡がしがみついた時、
「皇子！」
その声に見れば、剣を手にした兵が十人ばかり、二人を取り囲んでいた。

もう、五年。
そんなになるのか……。
大海人皇子は、冷たく汗に濡れた褥にあって、窓から漏れる日の光を見つめつつ、思った。
昨夜また、宝大王が、河辺宮に御幸された。いつものように、大海人皇子の腰に跨って姦し、皇子の精を陰に吸い上げ、去っていった。
初めて大王が孕んだのは、何時であったか。
大王は二度、腹の子を流した。その都度、病に臥し、恢復すればすぐに河辺宮を訪ない、皇子を姦した。

……五年か。

宝大王が、有馬より帰還して、難波の長柄宮なる豊日大王の御前に現れ、この河辺宮を訪なわれるようになってより五年。

その翌日、豊日大王は崩御した。ふぐりを砕かれ、一年余り、寝屋で悶える日々を経て、ついに力尽きた。

宝大王は、板蓋宮の跡地に造営された岡本宮で大王の御位に即いた。再び高御座に昇った宝大王は、後を継がせるべき皇子を欲した。ただ一人の子である葛城皇子は難波にあり、その噂は聞こえてこない。とはいえ、かの皇子がたやすく大和の政事の実権を握ることを諦めるとは思えない。故に宝大王は、一日も早く孕み、生まれた子を日継ぎの皇子となしたい。胤を求めて、大王は幾度も河辺宮に輿を運ばせた。

宝大王とはじめてまぐわった時、……姦された、といったほうがよいか……四十を迎えて若い乙女のごとく、薄皮に覆われた脂の厚さに、なめらかに輝くその肌に、豊かに張った乳房に、皇子は抗う術もなかった。

だが今は。二度、子を孕み、膨れた腹部は、子が流れるとともに皺み、そこかしこに黒いしみが目立ち、目尻は陰気な険を帯びていた。

衣や化粧で綺羅を飾りたてるほど、無惨な衰えのみが際だつ。

ぬかだのいらつめ……。

あだ……。

口に出してつぶやいてみる。

大王宮に仕える歌人として、額田郎女が召されてから、五年。彼女との間になした十市皇女ともども、深く飛鳥の王宮に篭り、会うこともないまま、それだけの歳月が立った。大海人皇子はその間、老醜の宝大王とのまぐわいを浄めるように、女を求めた。幾人かの皇子、皇女も生まれ、大和の豪族どもとの絆もできた。

まぐわいこそが政事……。

かつて、蘇我鞍作が述べたが如く、豪族の娘どもとまぐわい、子が生まれる度に、飛鳥における大海人皇子の存在は、より高まった。より高まり、それだけであった。

大和の政事のすべては、飛鳥の王宮にいます大王が握っている。否、大王と、その側近く侍る鏡郎女ら土蜘蛛の女どもが握っている。豪族どもは、ただひたすら、大王から発せられる詔に随うだけ。逆らえば、早暁、ふぐりを潰された無残な姿でうち捨てられ、苦しみぬいて死ぬ。

皇子は、ただ、子をなした。それだけであった。

ひたすら女とまぐわった。それだけで、五年の月日が費やされた。

「誰ぞ」

酒の杯を口に運ぼうとして、魚油にひたした灯火が揺れた。

「置始比等か」

「然り」

部屋の戸口に、忠実な、いちばん年かさの舎人が膝を突いていた。

「如何した」

振り返ると、髪や髭に白いものが目立ち始めた比等が、目尻を吊り上げ、貌を強張らせている。
「山田寺より、法師が」
山田寺は、かつて逆賊として討たれた蘇我石川麻呂が財を費やして建立した寺。
「法師？」
「然り。山田寺におわす蘇我赤兄より遣わされた法師」
比等はにじり寄り声を潜めた。
「皇子に、疾う来られよと……讃良皇女が、山田寺におわす故に、と」

九年前、同族の誣告によって謀叛の汚名を着せられた蘇我石川麻呂とその一族が、立て籠もったのが山田寺であった。追い詰められた彼等は、次々と自ら命を絶った。
四歳だった讃良が、自決した母から額田郎女に託されたのも、山田寺の庫裏であった。
その夜、山田寺では、釈尊の降誕会が開かれていた。蘇我の一族が参集し、夜を通して経を読み、大和の安寧と繁栄を祈念するという。
法師に導かれて寺の門をくぐると、あかあかと松明が焚かれ、金堂から読経の声が低く響き渡ってきた。
こちらへ……。
通されたのは、中央にそびえる五重塔であった。法師が軽く扉を叩くと、静かに開いた。
「大海人皇子か」
塔の内部は薄暗く、灯火が五人の男どもを照らし出していた。奥に座しているのは、王族の衣

と冠を着けた、年の頃は十八か九か、狭い額と細い眼、薄い唇がかすかに笑みを浮べていた。その左右に二人ずつ、見知った顔は蘇我赤兄、三十路半ば、瓢箪のように長い顔に眠たげな眼。物部鮪、守大石、塩屋小代。
にこやかな笑みを浮べる蘇我赤兄が、残る三人の名を挙げ、名が呼ばれる度に三人は、唐人のように両手を挙げて拝礼した。
最後に、赤兄は奥に座した若い王族の名を告げた。
「有馬皇子」
ありまのみこ……。
大海人皇子は息を呑んだ。亡き豊日大王の長子。豊日が健在ならば、当然、日継ぎの皇子、すなわち、いずれ大王の高御座に即くべき者として遇されていたはずの皇子。
その有馬皇子が何故に、讃良を……。
「まずは、酒を」
有馬皇子が赤兄を促し、赤兄は、杯を差し出した。
「讃良という乙女は、皇子の養い子であったな」
酒を注がれつつ、有馬皇子の言に、大海人皇子は背を伸ばし、貌を引き締めた。
「今日、多治比皇子が、讃良に殺された」
大海人皇子は凝然と、笑みを消さずにこともなげに言う有馬皇子を見つめた。
多治比皇子は、豊日大王の子。母は違えど、有馬皇子の弟にあたる。
大海人皇子の舎人どもは、讃良を皇女と呼ぶ。葛城皇子の血を受けている以上、皇女には違い

ないが、讃良を知るものは少なく、王族とは認められていない。
王族にあらざるものが、王族を殺した。まさに謀叛であり、その罪は同族にも及ぶ。
「多治比は、香久山で殺された」
有馬皇子は、自らも酒盃を受けつつ、続けた。
「香久山は神のいます山。何ゆえに多治比皇子が、禁を犯して香具山に入ったのか、吾は知らぬ。また、何故、讃良なる乙女が香具山にいたか、讃良に問うても、讃良と共にいたいま一人の乙女に問うても、共に応えぬ。多治比皇子の伴の兵は、皇子がいま一人の乙女を姦そうとして、讃良に殺されたと言う」
笑みをおさめ、吐息をついて有馬皇子は言った。
「多治比皇子は、その性、無道く、邑邑で乙女を姦し、田畑を荒らして民を苦しめる。ゆえに、姦そうとした乙女と共にいた讃良が多治比皇子を殺しても、罪は讃良のみにあるのではない。故に……」
有馬皇子は、大海人皇子の眼を覗き込むように言った。
「讃良を、罪に問う気はない」
「讃良は……」
大海人皇子はしわがれた声で問うた。
「いずくに？」

「讃良」

薄暗い庫裏の中で、木幡は促すように言った。二人の乙女の周囲を、矛を携えた兵が五人、立っていた。戒めを解かれ、目の前に粥を注がれた椀が置かれていた。飢えと渇きのあまり、椀に手を伸ばした木幡は、微かにも動こうとしない讃良を、気遣わしげに見つめた。
「食べねば……」
讃良は、戒めを解いたかわりに、突きつけられた五本の矛を凝視しつつ、何も言わなかった。
木幡はうつむき、椀に伸ばした手を、再び膝に置いた。
「強き乙女よ」
椀を運んできた蘇我赤兄の伴部が、貌をしかめた。
「あと幾日、ここに押し込められているか、分からぬぞ」
讃良は、眦を震わせつつ、倣岸に顎をあげて喋り続ける伴部を睨んだ。
「この庫裏はな、かつて、大王に背いた石川麻呂の妻どもが、自ら剣で胸を突いて死んだ所」
讃良の肩が、びくりと震えた。
「石川麻呂の恨み、その妻どもの恨みが、この庫裏の裡に残っている」
伴部は笑った。
讃良……。木幡が声をかけようとして、のどの奥で潰れた。
讃良は、両手で膝を掴み、かみ締めた唇に血がにじみ、四肢が細かく震えていた。
「怖いのであろう」
肩をそびやかし、伴部はあざ笑った。
「どこまで、耐えられるかな」

突然、讃良は立ち上がった。獣のように咆哮し、伴部につかみかかった。膝が、伴部の股間に突き刺さった。白眼を剥いてくずおれる伴部を、幾度も蹴り上げた。

木幡が悲鳴をあげた。五人の兵が突き出した矛を、その四本をすばやくかわした讃良の貌を、横薙ぎに払った矛の柄が撃った。

讃良は仰向けに倒れ、五人の兵が覆いかぶさるように殺到した。

「心を安んじられよ」

有馬皇子は、膝を乗り出した大海人皇子を手で制した。

「讃良も、いま一人の乙女も、この寺の裡にいる。食も暖も与え、手厚く遇している」

「では……」

大海人皇子は居ずまいを正した。

「罪に問わぬならば……」

「返せ、と？」

有馬皇子は、眼差しをそむけ、酒盃を唇に当てた。

「無事、お返ししよう。ただ……」

塔の扉が叩かれた。蘇我赤兄が僅かに扉を開け、やってきた者と言をかわし、再び静かに扉を閉め、有馬皇子に耳打ちした。有馬皇子は、わずかに眉根を顰め、哄笑した。

「讃良という乙女、まことに面白い」

気遣わしげに注がれた大海人皇子の眼差しに、有馬皇子は傲岸に見返した。

「粥を運んだ赤兄の伴部のふぐりを蹴り砕いたそうな」

「出せ！」

讃良はわめいた。

「吾を、ここより出せ！」

数倍に増えた兵の矛に囲まれ、縛り上げられながら、幾度も額を床に打ち付けつつ、讃良はわめいた。

「出せ！」

「讃良！」

讃良にしがみついた木幡は、兵どもに向かって叫んだ。

「讃良の母は、この庫裏で死んだ。讃良はそれを知っている。讃良を、ここから出せ！」

「赤兄よ」

有馬皇子は、傍らの蘇我赤兄を見やって言った。

「汝の伴部を男でなくした乙女を、汝は如何する？」

「皇子の……」

蘇我赤兄は、うつむき加減に、静かに言った。

「意のままに」

有馬皇子は、大仰に、腕を組んでみせた。

「養い親たる大海人皇子に問おう」
面持ちを硬くして坐す、大海人皇子に眼差しを向け、有馬皇子は言った。
「手に負えぬ乙女。吾は、すぐさま、大海人皇子に返したい。されど、ただ返せば、赤兄の心は収まるまい。されば」
眦を引き締め、有馬皇子は言った。
「大海人皇子が、飛鳥の宮なる大王を殺せば、二人の乙女を返そう」

大王を？
問い返そうとして、大海人皇子は、咄嗟に事態を悟った。
父なる豊日大王が崩御し、日継の皇子たる地位を失った有馬皇子。宝大王の御世になった後、かつての権勢を失った蘇我。彼らが手を組んで、宝大王に謀叛を起こそうとしているのだ。
山田寺で開かれた降誕会にことよせ、謀叛の密議を練るさなか、異母弟なる多治比皇子を讃良に殺されたことを知った有馬皇子は、それを奇貨として、大海人皇子を謀に巻き込もうとしている……。
「大海人皇子よ」
有馬皇子は居住まいをただし、面持ちを引き締めた。
「宝皇女が大王の高御座に即いて後、無用の興事に財を費やし、民を使役し、国々は疲弊し、恨みの声が巷に満ちている」
同じことを、いつか聞いたことがある……。

そう、異母兄なる葛城皇子。難波宮にて葛城皇子は、眼の前で語る有馬皇子の父なる亡き豊日大王を難じて叫んだ。諸々の国や邑の民は、度重なる使役に疲弊し、重き税に苦しみ……。
赤兄や、豪族どもは、宝大王の暴政を並べ立てる有馬皇子に、顎を引いてうなずきあっていた。だがもし、謀が成功し、彼らが有馬皇子を奉じて大和の政事を司る官位を得たとしても、おそらく同じことが繰り返されよう。
「しかも、宝大王は、側近くに侍る女どもにのみ政事を諮り、豪族どもはただ、大王の詔を承るのみ、逆らえば誅戮される。かような暴政が続けば、やがて大和は衰え、新羅や唐に侵され滅びよう」
「皇子はご存知か」
蘇我赤兄が口を開いた。
「何を？」
「百済と新羅との間に軍が起こっている。いまだ大きな軍にはならぬものの、国の境を越えて、互いに兵を派し、やがて唐が新羅に助勢いすることになろうと、百済より戻ってきた吾らが一族の者が報せた」
新羅の後ろ盾たる唐が大軍を送ってくれば、百済はひとたまりもない。必ず大和に助力を頼んでくるだろう。
「しかしながら大王は今、阿倍比羅夫に命じ、軍を調えさせている」
赤兄は静かに告げた。
「越より水軍を発たせ、北の秋田、渟代、津軽、粛慎等の蝦夷どもをも討ち随えるべし、と。

兵の数はおよそ三千、兵を乗せる船二百余を造らせている」
北方に大軍を割いてしまえば、百済に兵を送る余力はない。さらに、軍が長引けば、ますます大和の財は涸れる。百済の滅びを座視するしかない。
赤兄の弁を聞きつつ、大海人皇子はふと思った。あるいは宝大王は、ただ百済を救援するのではなく、三韓、さらには唐をも討ち、大和に服属せしめようと図っているのではないか。阿倍比羅夫に命じて水軍を北に派するは、三千の兵を、海を渡って三韓を征するだけの水軍として鍛え上げるためではないか。

かつて、息長大王の御世に、大和は二千の兵を三韓に派し、三韓ことごとく大和に服属す……。
そのような言い伝えがあった。厨戸皇子と蘇我馬子が編んだ国史にもそう記されているはず。蘇我の者より他に誰も国史を読んだ者はいない。にもかかわらず、まことしやかにそう語り伝えられていた。
三韓は鉄を産する。大和は、三韓との交易なくば、鉄を手に入れることはできない。故に、大和は百済と盟を結び、百済から鉄を得、百済人を招いて製鉄の技を学んだ。その百済は、新羅や、新羅の背後にある唐の圧迫にさらされている。軍を送って百済を救うべし、の声は日増しに高まっていた。
蘇我赤兄は、百済ではなく蝦夷への派兵を決めた宝大王を非難する。
しかし、宝大王や、その側近くある鏡郎女は、その先を見据えているのではないか。
そう思いつつも、しかし、大海人は口には出さなかった。今は、有馬皇子や蘇我赤兄の腹づもりを知るのが先だ。
「しかしながら」
有馬皇子が言った。
「阿倍比羅夫が三千の兵を率いて北に行けば、飛鳥の守りは弱まる。すなわち、吾らの謀にも都合がよい」
なるほど……。阿倍が兵を率いて飛鳥を発てば、宝大王を守る兵は、鏡郎女が率いる土蜘蛛のみとなる。
「さらに」
有馬皇子は、眼を細め、身を乗り出して大海人皇子を見据えた。
「吾らが軍を起こすとともに、飛鳥宮の奥深くにいます大王が崩御したまえば、側近くに侍る女どもも混乱し、たやすく討ち平らげられよう」
「その役目を吾にせよと？」
大海人皇子は、眉を顰めて首を振った。
「吾に、そのような力はない」
「皇子自らの手でなせ、というのではない」
有馬皇子は、唇を歪めた。
「額田郎女をして、大王を誅戮させればよい」
冷たい庫裏の床に、讃良は両手を背にねじあげられて縛られ、左右の足首には枷をはめられ、

それでもなお、兵に噛み付いたため、口には猿轡をはめられ、俯せに床に転がされていた。その傍らに木幡が、両手のみを背に回されて縛られて座し、気遣わしげに讃良を見つめていた。

讃良は、低く呻きつつ、厳しく縛られた四肢を震わせていた。その眼は怯えたように見開かれている。額の生え際から、汗が滝のように流れていた。

木幡は、矛を構えて立つ兵に向かい、幾度も叩頭して訴えた。

「讃良は苦しんでいる。せめて、猿轡のみを外せ」

「男のふぐりを砕く、恐ろしき乙女」

見張りの兵がはき捨てるように言った。

「戒めを解くわけにはゆかぬ」

知っていたのか……。

両膝を掴んでうつむく大海人皇子に、有馬皇子はかさにかかって言い立てた。

「額田郎女は、元は皇子が妃。讃良と共に十市の里に長く住み、己が娘のように慈しんでいたと聞く。そして今は、宝大王に寵される歌人。されば、大王に供御される食に毒を含ませる事はたやすいであろう」

拙い策よ……。

大海人皇子は、次第に心が冷えてゆくのを覚えた。

額田郎女が、かつて肌を合わせて子をなした大海人皇子の頼みであっても、素直に諾するような女ではないことを、彼らは知らない。諸々の豪族どもから大王家の皇子に妻として献じられる

女どものように、親や夫にひたすら服従すると思っている。

まして、額田郎女がかつて、土蜘蛛として鞍作や石川麻呂を死に至らしめたことを、彼らは知らない。讃良が山田寺に押し込められたと聞けば、額田郎女は必ず忍び込み、有馬皇子や蘇我赤兄を誅し、讃良を救い出そうとするにちがいない。幾百の兵で固めていようとも、必ず救い出すだろう。

「ひとつ問う」

大海人皇子は貌をあげ、問うた。

「宝大王を誅戮して後、誰が大王の御位を継ぐのか？」

有馬皇子は、一瞬鼻白み、やがて笑みを作って応えた。

「吾かもしれず、あるいは大海人皇子かもしれず、諸々の豪族どもが推す皇子が、大王位を継ぐことになろう」

やはり……。大海人皇子は、心の裡でうなずいた。

有馬皇子は、かつての権勢や既得の権を取り戻したい豪族どもの力を借り、大王位に即きたいだけなのだ。大和の行く末や民のことなど、念頭にない。

「さらに問う」

大海人皇子は言った。

「葛城皇子は、この謀に加わっているのか？」

有馬皇子は、すぐには応えず、眼差しを傍らの蘇我赤兄に走らせた。

「讃良なる乙女は」

蘇我赤兄は、低い声音で言った。
「葛城皇子と、石川麻呂が娘、美濃津子(みやつこ)との間になした皇女。されば、葛城皇子の助勢のなきことのあろうや」
あの酷薄な葛城皇子が、貌も知らず、自ら滅ぼした蘇我の血を引く娘を助けるために、かくも浅はかな謀に加わるものか……。
眼を伏せて沈思(ちんし)する様を装いつつ、大海人皇子は心の裡でつぶやき、口を開いた。
「岡本宮にいる額田郎女には、めったに会うこともかなわぬ」
郎女を説得するには、時間がかかる。蘇我赤兄がうなずき、言った。
「この三人を、皇子の河辺宮に住まわせる」
物部鮪、守大石、塩屋小代の三人が立ち上がった。赤兄は続けた。
「逐一(ちくいち)、この三人をして、吾に経緯を報せたまえ」
三人の暗い眼差しを浴びながら、大海人皇子は悟った。裏切らぬよう、見張らせるわけか……。
「最後に問う」
大海人皇子は、眦(まなじり)を引き締めた。
「今宵は、讃良に、会わせてはくれぬのか?」
「否」
有馬皇子は言下に拒んだ。
「それは叶(かな)わぬ」
「讃良が無事かどうか、この眼で確かめたい」

言を荒げる大海人皇子を、有馬皇子は冷たくはねつけた。
「讃良は無事だ」
「もし、讃良に何かあれば……」
大海人皇子は立ち上がった。
「汝等、必ず報いを受けようぞ」